

修行体験記 「料理を通して」



修行道場での最初の生活場所である「鐘酒寮」にも慣れ始め、早くも一ヶ月が経とうとしていた時、突然の転役（部署が変わること）が私のもとに言い渡されました。

次の場所は「典座寮」。

どのような所か分からないまま転役したところ、そこは修行僧たちのすべての食事を作る部署で、それまで料理の経験がほとんどない私は、一気に不安になりました。

そこでは、当番の日には誰よりも早く起きて、朝食のお粥を炊き、沢庵を切り、さらには昼食と夕食の仕込みもしなければなりません。

最初の頃は、起きた際にまだ寝ている人たちを見ては、自分もまだ寝ていたいと思いき、不慣れだったため、作るのにも時間がかかり、いつも消極的な気持ちでした。

そんなある日、煮物を作った私に先輩から、「おいしかった。また頼む。」と一言。そのことばに私は、嬉しさと同時に、情けなさを感じ、大事なことに気づかされたのです。

それは、寝たい、やりたくない、などの自分勝手な考えを捨て、他者のために何が出来るのか。そう考えれば、料理も大事な修行の一部である、ということでした。◆田中仁秀

編集後記



空気も一段と涼しくなり、季節は徐々に秋へと向かっています。辺りを見渡せば野に咲く彼岸花など、小さな秋が目に入ることもあります。

そんな中、都会ならではの夏の終わりを感じさせる光景があります。それは会社員の服装です。暑い夏の間は白いシャツ姿の彼らですが、気温が下がりに秋に入ると黒い背広姿へと変化をします。いつの間にか辺りから白いシャツ姿の会社員の姿がなくなっているのに気がつく、「夏が終わったんだな。」と感じます。

秋まであと一息。気温の変化に気をつけて、体調を崩さないようにしていきたいでしょう。◆中野太秀

発行 曹洞宗総合研究センター教化研修部門
〒一〇五・八五四四
東京都港区芝二・五・二曹洞宗宗務庁内
☎〇三・三四五四・六八四四

9月号

ひだまり

今月のエッセー

お手紙、ありがとう。

一通の手紙が私のもとに届きました。一見、なんの変哲もない茶封筒ですが、宛名の文字を目にした瞬間、これほどの驚き、懐かしさ、そして恥ずかしさがいっぱいに押し寄せる手紙は、唯一この手紙ぐらいのものだろうと、その場で身震いしたほどでした。

「まだ見ぬ、未来のカックオイイ」

畔柳 公潤 様

送り主は見なくても分かります。当然です。私自身が書いたのですから…。

その手紙は私が中学時代に書いたものでした。中学校の恒例行事の一つとして『十年後の自分へ』というテーマで無理

矢理書かされたことを覚えています。

この手紙、普通ならすぐに読んでやるところですが、宛名に添えられた「まだ見ぬ、未来のカックオイイ」の恥ずかしい文句に心挫け、未開封のまま引き出しに封印していました。しかし先日、このエッセイの執筆を機に過去の自分と向き合おうと決心したのです。

手紙の冒頭は終始質問の山でした。

『背は伸びたか？』…伸び悩んでるよ。

『お寺は継いだか？』…その気だよ。

『家族は死んでないか？』

…普通は元気がどうか聞くもんだろ。

『辛いことはないか？』…。

『大丈夫、その辛さを知っている人間は他人にもやさしくできるんだ。』

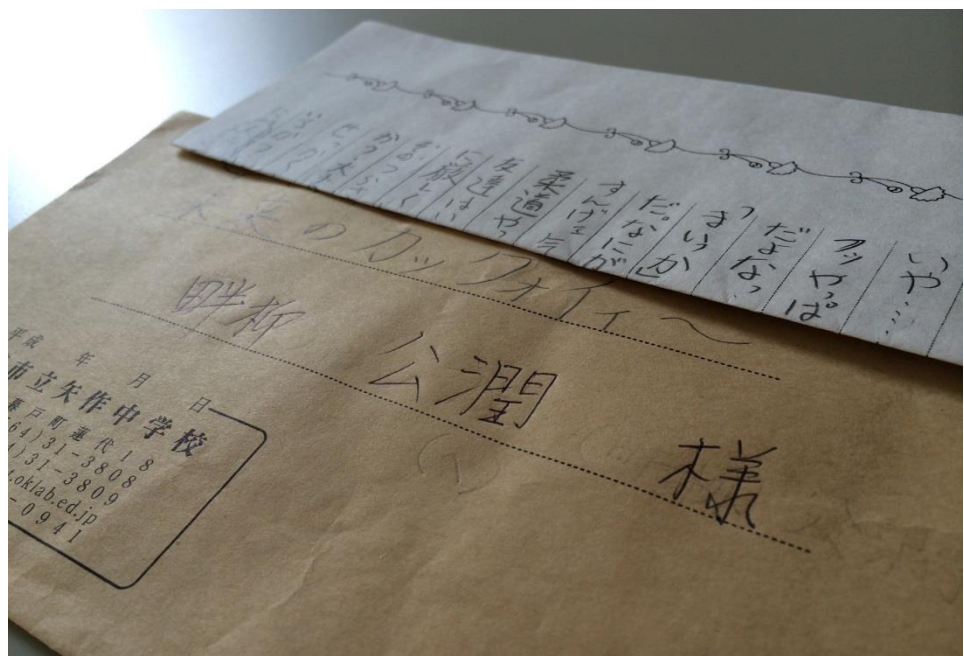
『迷いはないか？』…。

『大丈夫、迷いをなくしたとき、人は成長をとめるんだから、悩んでくれ。』

『最後に、親を大切にしているか？』

『してなかったら、絶対しろ。いいな。』

『さよならは、言わないぜ。』
アホでキザな奴なんだろうけど…なぜだか、初めて自分に「ありがとう」と伝えたい。そう思いました。◆畔柳公潤



法のお話



二年度
竹村信彦
たけむらしんげん

『善い行いの実践』

「仏教って何ですか？」とよく聞かれることがありますが。そんな問いの答えの一つに、七仏通誠偈というものがあります。これはお釈迦様の教えを一つにまとめたと言われているもので、次のような内容になります。

- 諸悪莫作 (悪いことをせず)
- 衆善奉行 (善いことをする)
- 自淨其意 (意(こころ)をきれいにする)
- 是諸仏教 (それが仏教である)

この内容だけ聞いてしまうと、「なんだそんな簡単なこと」と感じてしまうかもしれません。しかし、頭で理解するのは簡単

でも、いざ日常生活の中で実践し続けていくとなると非常に難しいものです。お釈迦様は、この「善いことをする」についてこんなことを仰っています。

善からぬこととおのれに義なきことは
いと為しやすし
おのれに義ありて しかも善きことはいと
ときわめて 作しがたし

(法句経一六三)

つまり、善くないことを行うのは簡単であるが、善いことを行うのは非常に難しいというのです。私たちは、時として自分のことばかりを考えて行動してしまっています。そんな時、相手への思いやりを忘れて、自分に都合のいいこと、「善くないこと」を行ってしまうのです。先日、この「衆善奉行(善いことをする)」を改めて考えなおす出来事がありました。私は長野県の出身です。地元では毎年八月にお盆があり、ご先祖様をお迎えします。そのお盆を家族と過ごすために実家に帰省していました。

帰省最終日、用事を終えて車で家に帰

る途中、お茶が入ったペットボトルを大事そうに抱きかかえて道の脇に腰かけている祖母を見かけました。祖母は車の免許を持っていないので、歩いて出かけていたようでした。

汗びっしょりになって座っている祖母の姿を見つけた私はすぐに車を止め、家に帰る途中だというので一緒に家に帰ることにしました。こんな暑い日に何の用事で出かけていたのか疑問に思った私は、車の中で祖母に聞いてみました。すると、驚くような答えが返ってきたのです。

「信彦が東京に帰るときに、喉が乾かないようにお茶を買ってきたんだよ。」

暑い中を歩き、自分が一番喉が渴いているにもかかわらず、私のために家から一口ほど離れた自動販売機までお茶を買いに行ってくれたのです。その行いが、私にはとても尊いものに感じられました。

この祖母の姿を通して、自分のことばかり考えるのではなく、相手への思いやりをもって実践していくことの大切さを学んだのです。

いろんな仏様

『大権修利菩薩』

だいげんしゅり ぼさつ



今回ご紹介するのは大権修利菩薩です。この菩薩様は曹洞宗寺院にお祀りされ、四月号で紹介した達磨大師と対をなす位置に安置されています。唐時代の帝王の服装をまとい、右手を額のところにまで上げて遠くを見ている姿をしています。

中国ではもともと船を守る神様でしたが、日本に入ってから、仏教が途切れないでずっと続いていくように見守る神様になったと言われています。

曹洞宗の教えを日本に伝えられた道元禪師が中国から戻る際この菩薩様が密かに後を追って来られたと言われています。そこで道元禪師が問いかけると「私は正しい教えを護持するためにまいりました」と答えられたそうです。

祥泉院にもお祀りされているので、お詣りしてみてください。

◆ 國生徹雄



私の〇〇自慢

『菜切り包丁』



写真の包丁は大本山永平寺での修行時代、禪寺の台所である「典座寮」という部署に配属された折に頂戴したものです。

毎日約二百人分の具材を切るの、切れ味の衰えは早く、手入れが欠かせません。暇を見つけては研石に掛けます。結果、切れ味が戻り、効率もあがりますし、余計な力を入れなくて済むので怪我也減ります。また、切った具材の断面も滑らかになり、舌触りもよくなるので、料理も美味しく出来上がり、気持ちよく次の調理に臨むことが出来ます。

厳しい修行時代を共にしたので、この包丁には特別な愛着があります。しかも、この包丁は、「物にも想いは伝わる」ということを教えてくれました。包丁に込めた想いは具材に伝わり、やがて美味しい料理となって、食べる人と作り手の私に喜びを与えてくれたのだと思います。

◆ 田代浩潤